

第 4 分科会 4 東京都医師会	ことばの異常と難聴
	大島耳鼻咽喉科気管食道科クリニック 大島 清史

目的

軽度から中等度難聴は、気付かれないうちに、就学や学習面に大きな支障を来すことも少なくない。そのまま放置されると深刻な言語能力の遅れにつながることも指摘されている¹⁾。学校健診における音声言語検診の事後措置の観点から難聴児の存在を検討した報告はあまりない。学校健診で「ことばの異常」についての難聴児の存在を検討した。

方法

対象は平成 23 年と 24 年の担当小学校 3 校の学校健診で「ことばの異常」を指摘され、当院を受診した 26 名である (表 1)。いずれも言語聴覚士による評価を受けている。聴力障害に関しては純音聴力検査上、平均聴力レベルが 30dB 以上となる者を聴力障害ありとした。

表 1 対象児

	女子	男子	計
一年生	3	12	15
二年生	1	6	7
三年生	0	1	1
四年生	1	1	2
五年生	0	0	0
六年生	0	1	1
計	5	21	26名

結果

言語異常は歯間性構音 17 名、置換 2 名、歪み 6 名、吃音 1 名であった (表 2)。難聴児の割合は、各群で 6 名 (35.3%)、2 名 (100%)、3 名 (50%)、0 名 (0%) であった (表 3)。全体では 26 名中 11 名、42.3% であった。難聴の種別は心因性難聴 2 名、滲出性中耳炎 1 名で他の 8 名はすべて 30 から 40dB の軽度感音難聴であった。感音難聴の原因を特定できたものはなく、一側性が 6 名、両側性が 2 名であった。

表 2 言語異常の分布

	歯間	置換	歪み	吃音
一年生	12	0	2	1
二年生	4	2	1	0
三年生	0	0	1	0
四年生	0	0	2	0
五年生	0	0	0	0
六年生	1	0	0	0
計	17	2	6	1名

表 3 聴力障害児の割合

	聴力障害あり	なし
歯間性構音	6	11
置換	2	0
歪み	3	3
吃音	0	1
計	11	15名

考察

今回の対象者は音声言語検診で「ことばの異常」を指摘された者で、滲出性中耳炎の1名と心因性難聴の1名を除き、難聴の自覚を持つ者はなかった。心因性難聴は2名に見られ、初診時35から45dBの感音難聴がみられたが、耳音響放射は正常で、カウンセリング等の施行により経過観察中である。軽度感音難聴を示した児童は当初は難聴の訴えは全くなかったが、よく聞くと、友人との会話が時にわかりづらいことがあることなど、学校生活に影響する面が見られることがわかった。難聴は125から1000Hzの低音障害が中心で、高音障害型はみられなかった。現在のところ内耳奇形等の原因は特定できていないが、継続して定期的な聴力検査を行っていく予定でいる。

言語検診は言語異常そのものだけでなく、その背景にある児童生徒の学校生活に影響を与える様々な要因を知る手がかりになることが知られている。今回は軽度難聴の存在がわかったことで、学校生活ばかりでなく、家庭での対応に関しても周囲の人たちの理解を深めるきっかけになった。軽度および、中等度難聴のきこえの特徴として、ささやき声がきこえない、話はわかるが細部が聞き取れない、助詞の聴き落とし、子音の聴き誤り、背後から聞き取りにくい、騒音下での聞こえが極端に悪くなる等の特徴が指摘されている²⁾。今回も同様の特徴がみられており、保護者と本人は、指摘され、初めて自覚するに至った。

結論

学校健診で言語異常とされた者の約40%に聴力障害が見られた。難聴の自覚症状があるものは2名のみだった。歯間性構音と吃音では聴力障害は少ない傾向があった。音声言語検診がその背景にある聴覚障害を知る重要な手段となることが認識された。

1)加我君孝、新正由紀子：新生児聴覚検診の役割

1. 検診の実際とその結果－高度難聴・人工内耳・中等度難聴と言語性IQによる評価. 耳喉頭頸
79：473-480, 2007

2)日本耳鼻咽喉科学会 学校保健委員会：学校保健
での音声言語障害の検診法 7. 聴覚障害による言語異常 19-22, 2012